

「銀河鉄道の夜」の主題

—自己浄化の旅—

横山 明弘

はじめに

「銀河鉄道の夜」は難解な作品と言われ、様々に論じられているが、その難解さの一因は作品に投影されているキリスト教思想の解明が、為されていないからではないだろうか。この論文においては、作品からキリスト教思想を抽出することによって、作品の主題を考察したい。テキストは後期形に拠る。

宮沢賢治とキリスト教については、すでに佐藤泰正氏や上田哲氏による研究がある。特に上田哲氏の著作である『宮沢賢治 その理想世界への道程』⁽¹⁾は、私がこの問題に取り組んでいる時に刊行され、大いに刺激を受けた。この論文においても参考にさせて戴いた。

尚、今年（昭和62年）2月、私が勤務する学校で、中学1年生を対象にこの作品を取り扱った。主題をまとめさせたものの内、優れたものを論文の末尾に付け加えておく。

1. ジョバンニの孤独と嫉妬

この作品の特に前半において、ジョバンニは孤独で嫉妬深い少年として描かれている。まずその点について把握しておきたい。

孤独で嫉妬深い性格は、彼の家庭環境と関わっている。父親は北の方の漁に出ていて何か悪いことをやり、監獄に入っているといううわさがたてられている。とにかく今は不在で、その上母親も裏町の小さな家で病に臥している。そのためかジョバンニは朝は新聞配達、放課後は活版所で活字拾いのアルバイトと忙しい。毎日教室でも眠く、本を読む暇も読む本もない。

ジョバンニの家庭は、このように貧しく恵まれていないので、ジョバンニは皆からからかわれ、傷ついて孤独に陥るのである。

青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、「よう、虫めがね君、お早う」と云ひますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこっちも向かずにはわらひました。

ジョバンニは何べんも眼を拭ひながら活字をだんだんひろひました。⁽²⁾（傍点引用者）

そんなジョバンニは、父親同志が友人で、幼い時から遊び相手だったカムパネルラに憧憬を抱いている。博士である父を持つカムパネルラは、優等生で人望厚く少年達の中心的存在であったからである。

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところに集まってるました。それはこんやの星祭に青いあかりをこ

しらへて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。(傍点引用者)

ところがそのケンタウルス祭の夜、烏瓜を流しに来たザネリのグループに「ラツコの上着が来るよ」とはやされて、ジョバンニはまっ赤になり動揺する。だが彼にとってより不幸だったことは、その集団の中に自分が唯一人頼みとするカムパネラが居たことである。

ジョバンニは、何とも云へずさびしくなって、いきなり走り出しました。

ジョバンニの孤独は、このとき体の芯まで染み通った筈だ。ジョバンニはこのつらい現実から逃れようと、黒い丘の頂にのぼっていき、その後なぜか、カムパネラと二人銀河に旅立つのである。

銀河鉄道の旅が始まってまもなく、鳥を捕る人が乗り込んでくる。ジョバンニはこの鳥捕りに対して、わけもわからず気の毒でたまらなくなり、「この人のほんたうの幸になるなら自分がある光る天の川の河原に立って百年つゞけて立って鳥をとってやってもいゝといふやうな気がして、どうしてももう黙ってゐられなくなる」反面、「僕はある人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕はだへんつらい」と思ったりする。カムパネラとの旅を誰にも邪魔されたくないのである。

このジョバンニの鳥捕りに対する過剰な同情は、幻想第四次の世界においても、鳥を捕り続けなければならない因果に生きることへのものであろう。この鳥捕りは、生き者をあやめることが仕事である点と、同情を持って描かれている点において、「なめとこ山の熊」の小十郎にきわめて近い存在である。

さてジョバンニには、鳥捕りよりももっと強力なライバルが現われる。船が氷山に衝突して、溺れ死んだ女の子が、家庭教師や弟とともに乗車してきたのである。ジョバンニは案の上、カムパネラとおもしろそうに話している女の子に嫉妬する。

ジョバンニはもう頭を引っ込めたかったですけれども明るいところへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらへてそのまま立って口笛を吹いてゐました。……中略……(あゝほんたうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネラだっであんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ。)

しばらくの間、ジョバンニはこの嫉妬の苦しみから逃れることができず、それが繰り返し描かれる。

母は病に臥し、父は監獄に入っているとうわさされ、アルバイト先でも同級生からもからかわれるジョバンニは、心を大きくもつことができず、誰か一人でも自分を理解してくれ、一緒に居てくれる友が欲しかった。それを妨げようとする女の子は、ジョバンニにとって激しい嫉妬の対象とならざるをえない。

2. 自己犠牲

このようにジョバンニは、恵まれない環境に育ち、孤独で嫉妬深く描かれているが、鳥捕りに対して示したような優しい性情も持っている。作品の後半においては、ジョバンニのこの優しい

性情に自己犠牲の観念が植えつけられていく過程が描かれる。⁽³⁾

まず先程の女の子と弟を連れて乗車した家庭教師の話は、ジョバンニとカムパネラにとって衝撃的であった。青年達は太平洋(?)を渡航中、氷山にぶつかり溺れ死んだのである。他の子供達を押しつけてボートに逃れることもできたのだが、とてもその勇気がなかった。それでもこの二人を助けるのが自分の義務だと思ったり、「このまま神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だと思」ったりしているうちに水に落ちてしまったのである。

そこから小さないのりの声が聞こえジョバンニもカムパネラもいままで忘れてるたいろいろのことをぼんやり思ひ出して眼が熱くなりました。

カムパネラはこの青年達の溺死による自己犠牲の死を聞いて、自分の死が想起され自分の選択を正当化し、母親にすまないと思っていた感情を慰める。ジョバンニは氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗り、風や凍りつく潮水や烈しい寒さとたたかって、一生けんめい働いている人を思い出し、次のような言葉を吐く。

ぼくはそのひとにほんたうに気の毒でそしてすまないやうな気がする。ぼくはそのひとのさいはひのためにいったいどうしたらいいのだろうか。

自己犠牲の死によって霊と化した青年達との遭遇が、ジョバンニを「浄化」させ、人の幸福のために生きるように方向づけているのである。

「自己浄化」を迫る第二の契機は、蝸の火である。

川の向ふ岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のやうに赤く光りました。まったく向ふ岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした。

川の向うに蝸の火が出現し、女の子がその火について父親から聞いたという話を語り始める。バルドラの野はらに住んでいた一匹きの蝸は、小さな虫やなんかを殺して食べていた。ある日、いたちに見付かって食べられそうになったとき、井戸に落ちて溺れ始め、次のように祈ったという。私はいくつも命をとってきたのに、自分が食べられそうになったときは一生懸命にげだ。どうして私は私の体をだまっていたちに呉れてやらなかったのだろうか。こんなにむなしく命をすてずにどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。(傍点筆者)

この女の子も蝸の話によって、むなしく命を捨てはしなかった自分や弟を慰めているのである。

第三は銀河鉄道を下車した後に発覚したカムパネラの死である。カムパネラは舟の上から烏瓜のあかりを水の流れる方へ押しやろうとして、水へ落ちたザネリを救ったのだが、自分はそのまま溺死する。

夢から覚醒したジョバンニは、その話をマルソから聞き、カムパネラはもうあの銀河のはずれにしかいないと思う。それ以上の感想は漏らしていないが、カムパネラとの別離の前に宣言した「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百べん灼いてもかまわない」という自己犠牲の思想が、ここで凝固し肉体化したと私は考える。

この作品は父が漁に出て不在で、母が病床にあり、孤独でひがんでいた少年が、銀河鉄道の旅

での青年達との遭遇、女の子による蝸の話、さらにカムパネララの死を通して、「浄化」されていく話なのである。

3. カムパネララの役割

先に見たように、ジョバンニはカムパネララに憧憬を抱いていた。カムパネララの方もジョバンニが、いつも忙しく働いたりしているのを気にはかけていたが、ザネリにからかわれているのを成り行き上、「気の毒そうに、だまって少しわらって、怒らないだろうかといふやうに」見ていただけだった。

この後すぐに、カムパネララはザネリを助けようとして溺死するが、カムパネララの霊はジョバンニのことが気にかかって、丘で孤独にうちひしがれているジョバンニの所へ行って、銀河の旅に誘い出したのである。冒頭の授業で、先生の質問に答えられなかったジョバンニをカムパネララは気の毒がって返事をしなかったが、この二人の関係を考えるとこのことは、少しも不自然ではない。

ところでカムパネララが霊と化して出現していることは、次の描写を読めば明らかである。

すぐ前の席に、ぬれたやうにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見てゐるのに気が付きました。（傍点引用者）

新井正市郎は宮沢が霊が存在することに固い信念を持っていたと証言している⁽⁴⁾。この点については、宮沢を神秘主義者として位置づけようとした栗谷川虹氏の『見者の文学』に詳しい⁽⁵⁾。

さて銀河の旅の終わりに、ジョバンニがカムパネララに次のように決意を語る。

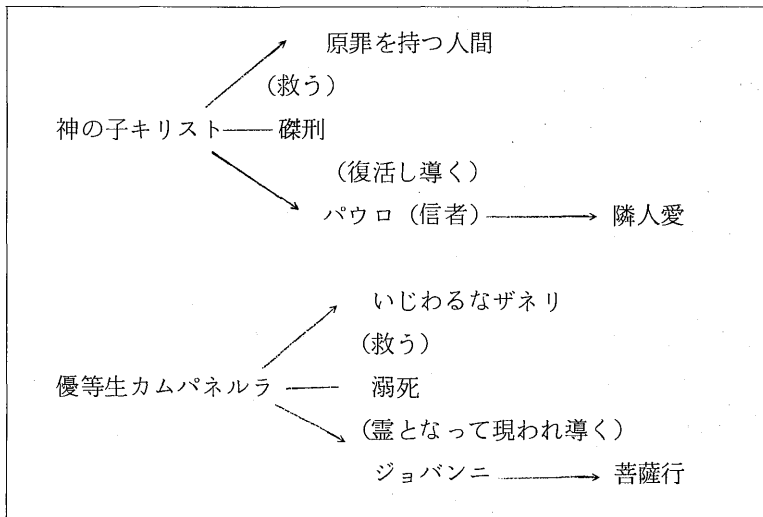
「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百べん灼いてもかまわない。」

「僕はもうあんな大きな暗の中だってこはくはない。きっとみんなのほんたうのさひはひをさがしに行く。」

カムパネララはジョバンニのこの力強い決意を聞いた直後、姿を消している。それはジョバンニを導いて、「浄化」させる役割を終えたからではないだろうか。キリストが十字架刑に処せられて、パウロのもとに出現しパウロを導いていったように、カムパネララは自己の死を契機として、自己犠牲の生き方と天上の存在を教えたのである。

カムパネララは、「ヨハネによる福音書」にある「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない⁽⁶⁾」という思想を生きた。人望があり、少年達の中心人物であったカムパネララが、ジョバンニをからかい、最もいじわるだったザネリのために死ぬ。そしてそのカムパネララの霊が、カムパネララを信じ頼っていたジョバンニを「浄化」して、「みんなの幸福のために生きる」という菩薩行の精神を持つに至らしめる。この構造は、罪がなく無垢だった神のひとり子キリストが、原罪を有する人間のために十字架刑に処せられ復活し、そのキリストを信じ隣人愛を実践する者を罪と死から解放するというキリスト教の核心部分と酷似していないだろ

うか。整理すると次のようになる。



宮沢は妹としを失ってから、妹からの通信を待ったり、あるいは受け取ったという内容を詩にしている。こういう体験が、死者が生者を導くという発想を生み、この作品に投影されたことは間違いのない事実であろう。

4. 「十字架」

この作品にはキリスト教に関する事柄が多く描かれている。「十字架」「バイブル」「賛美歌」「カトリック風の尼さん」等、これらは単に作品を彩る装飾にすぎないのだろうか。私は「十字架」にこそ、この作品の主題を解き明かす鍵があると考えている。

……その流れのまん中に、ぼうっと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らなただきに、立派な眼もさめるような白い十字架がたって、それはもう凍った北極の雲で铸たといったらいゝか、すきとした金いろの円光をいただいて、しづかに永久に立ってゐるのでした。

次の「ローマ人への手紙」を参照していただきたい。

わたしたちの内の古き人は、キリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだ⁽⁷⁾が滅び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。

キリストが十字架上で死ぬことにより、「わたしたちの内の古き人は、キリストと共に十字架につけられた」、つまり十字架は、私達が罪を葬り、新しく生まれかわることを象徴しているのである。ジョバンニもカムパネルラに導かれ、北十字から南十字をめぐる銀河の旅路に、ひがみ根性や嫉妬心を「十字架」につけたのである。「十字架」は単なる装飾品として描かれているのではなく、ジョバンニが罪を捨て去り、新しく生まれ変わる場所として、設定されているのである。

「自己浄化」の象徴として描かれているのである。

さらにこの「十字架」を銀河にたてたところに、宮沢のすばらしい独創がある。

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する。

正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。⁽⁸⁾

と宮沢は宣言しているが、銀河系を意識することによって、争いの原因となる小さな自我など捨ててしまえと言いたかったにちがいない。

ところで宮沢はこのように、キリスト教の思想を借りながらも、帰依はしなかった。その原因のひとつであると思われる問題を作品から窮うことができる。

銀河鉄道がようやく南十字に近づき、青年が姉弟に降りるように勧めた時、もう少し乗車していたいという男の子を弁護して、ジョバンニは女の子と問答する。

「天上へなんか行かなくなっていくじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといゝところをこさへなきゃいけないって僕の先生が云ったよ。」(傍線引用者)

「だってお母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「ここ」の解釈はむずかしいが、ジョバンニは死んでいないのでその自覚がなく、地上をさしているとは私は考える。すでに死んでいる女の子とは、生者と死者という立場のずれがある。したがってやはり、天上へ行くことしかできない者とこれから地上へ復帰していく者とのこの問答は、破綻を来たすしかない。上田哲氏はこの場面で「地上天国建設」の理想を語っていると述べているが、⁽⁹⁾宮沢は破綻を承知の上でそれを描いたのだろう。

ところで「僕の先生」を上田氏は、田中智学と考えているが、日蓮としてもよいのではないだろうか。宮沢が二十五歳で家を飛び出したのは、日蓮の遺文集が棚から落ちてきたことが、その機縁だったと伝えられている。宮沢はその御書を持って上京したのである。

日蓮は当時、阿弥陀仏の慈悲にすがれば、必ず極楽に往生できるという他力易行をすすめる浄土教信仰を批判した。その最も大きな理由は、現実の娑婆世界を捨てて、遠い極楽浄土に人生のすべてを委ねることに疑問を抱いたからである。⁽¹⁰⁾

日蓮が浄土教を批判した同じ観点から、作者はジョバンニに女の子の信仰を批判させている。キリスト教には「汝の隣人を愛せよ」という思想とともに、ある教団によっては、クリスチャンの生活原理とまで言われる「……世と交渉のある者は、深入りしないようにすべきである。なぜなら、この世は過ぎるからである」⁽¹¹⁾というような現実に対する消極的な思想が内包されている。宮沢が当時接触したキリスト教が、どういうものであったかという実証的研究が必要とされるが、熱烈な法華経信者であり、国柱会に入信し限実を変革しようとした宮沢には、天上をひたすら憧れるという思想は、受け入れがたかったと思われる。⁽¹²⁾

だがだからと言って、宮沢は天上をまったく念頭に置かなかった訳ではない。宮沢は異空間の存在を信じていたし、「天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券」を持っていたジョ

バンニは、皆の幸福のために、天上が存在することを地上に伝達する使命を作者から与えられている。天上の存在を知るとは、この現世を相対化し、あせりやねたみや不安や苦悩や欲望の追求を緩和させるのである。

おわりに

このように読んでくると、この作品は父が不在で母が病に臥し、孤独でひがんでいた少年が、その友の死を契機として、罪を銀河の十字架につけ、「自己浄化」を果たし、みんなの幸福のために生きようと新しく生まれ変わる話なのである。

ところで、私がしばらく通っていたプロテスタントの教会で、「清め」ということが、十字架との関係で盛んに言われていた。私はそこで、この作品との類似性に気づいたのだが、主人公が他者の悲劇を通して清められていく点と、人間が完全に清められることは不可能なので、「浄化」という言葉を使用した。心のけがれ、罪などを除くという意味である。

ただ、皆の幸福のために生きるということが、「自己浄化」という言葉の内容から、はみ出していることをここで述べておかねばならない。

宮沢が生前唯一刊行した『注文の多い料理店』⁽¹³⁾の序の末尾に、次のようなことが書かれている。

けれども、わたくしはこれらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。

宮沢は純粋なものを与えることによって、子供達が清められていくことを願っていたと思われる。この「銀河鉄道の夜」では、さらに皆の幸福のために生きるという積極的な生き方の種子を蒔こうとしたのではないか。

さて、宮沢がその晩年まで書き継ぎ、最も多く彼の思想を内包し、童話製作の意図とも合致しているこの作品が、教材化されることは不可能であろうか。この作品の教材化に何らかの参考になればと思い、我が校での⁽¹⁴⁾主題指導の実践を最後に付記することにした。

生徒の作品例

伊藤彰浩

孤独で僻んでいるジョバンニ少年の父は、漁に出たきり戻らず監獄入りのうわさまで流れ、母も病床に伏しているため、彼はアルバイトをして、多忙で貧しい生活を送っている。

ケンタウル祭の夜、母のために牛乳を取りに行ったジョバンニは、川へ烏瓜を流しに行く級友と出会い馬鹿にされる。ところがそのグループの中に優等生で大の親友のカムパネルラがいたので、ひとり天気輪の柱の下へ体を投げ出してしまふ。

しかしいつしか、カムパネルラと共に小さな汽車に乗り、無数の星が煌めく天の川を走っていた。途中鳥捕りや姉弟とその家庭教師の青年らと出会うが、ジョバンニはカムパネルラの独占を

邪魔された思いで、憂うつだった。けれども銀河の旅は彼の心を豊かにし楽しませてくれるのであった。

青年らと乗客らは一人の神らしい人に迎えられ、いつの間にかカムパネルラの姿も見えなくなってしまっていた。ジョバンニは眠りから覚めるとすぐに村に帰ったが、カムパネルラが川に落ちた最悪のザネリを救おうとして、溺死したことを知らされた。

この作品を通して作者は、親友の犠牲死を契機に短所を雄大な銀河で洗い落とし自己を清め、皆の幸福のために真理を追求して生きる自己犠牲の精神を悟るにまで成長した心の狭いじけた少年の転生のロマンを描いた。

田中琢三

寂しく孤独な魂の持ち主であったジョバンニ少年は、ケンタウル祭の夜、丘の頂上にある天気輪の柱の下で、冷たい草に身を投げていた。すると何時しか、彼は親友であり憧れを抱いていたカムパネルラと共に軽便鉄道に乗り、黄玉や水晶の煌めく天の川を走っていた。

この「幻想第四次の銀河鉄道」に奇体な鳥捕りや、難波にあい他の子供達の為にあえて救命ボートに乗らず、神の御前に行く方が本当に自分達の幸福だと思い、溺死した青年らが現れる。ジョバンニは彼らとのやり取りで自分の醜い自我を取り去り、人々の幸の為の自己犠牲に生きようとする心が生まれ、それをカムパネルラに告白する。本当の幸の探求を決意したジョバンニの前からカムパネルラの姿は消え、夢の中の旅は終わる。

ところでカムパネルラは現実にも溺れそうになった友人を助け、自己犠牲による死に至っていた。ジョバンニは、「カムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいない」という気がして仕方がないのであった。

「南無妙法蓮華経」——真理に帰入して成仏するという護符を持った一人の少年が、広大な銀河系宇宙を舞台にそれを達成する過程を作者は描いた。人間の幸福とは何か、それをどうして求めるか、という問題に対して、「真理に帰入」という一つの結論を出し、その「真理」とは何か、を問うている。また自己犠牲の精神も描いている。

福永達也

ジョバンニは丘の上で一人倒れていました。今日はケンタウル祭だというのに、何も楽しいことがなかったからです。やがて列車に乗っていました。親友のカムパネルラと一緒に、旅は北十字から南十字へ、各駅停車で途中二人はいろんなものを見してきました。

透き通る天の川、菓子になる鳥を捕る人、化石を掘る大学士、空の工兵大隊、狩りをするインディアン、やがて二人は女の子と同席になりました。カムパネルラは女の子と楽しそうに話を始めますが、ジョバンニは激しい嫉妬を覚えました。しかし彼等が南十字で降りてしまうと、人の幸福のためにどんなことをしてもいいと思うようになりました。するとそんな彼を見ていたカムパネルラは消えてしまいます。ジョバンニは悲しみました、一度誓った決心は心に残ります。

やがて丘から降りてきた彼は、カムパネララの死を知ります。

自己犠牲とは人のために自分の大切なものを捧げることですが、時として命を失うこともあります。しかしそこまでして、人は実行します。それが一番人間らしいことで、自分のためでもあることがその人には分かっているからです。それに報わせるために作者は神を登場させ、それを生きているうちに見たジョバンニが、心を入れかえるのも当然なことなのです。

掘井克紀

ジョバンニは貧しい家に生まれ、活版所に勤めていた。母は病気で、父は遠い海へ行っているのか、悪いことをして監獄に入っているのかわからないぐらい、家に居なかったからだ。

ジョバンニには、カムパネララという父の代から友達だった仲のとても良い少年がいた。彼は心遣いがとても良く、優しい少年であった。だから他の少年がジョバンニに悪口を言う時でも、彼は決して言わなかった。

ケンタウル祭の夜、母のために牛乳をもらいに行く途中、日頃から悪口を言ってくるザネリにからかわれ、川原に行った時もまたからかわれた。その時、カムパネララも何人かにまじって、笑っているのをジョバンニは見てしまい、たった一人の友人と思っていた彼に裏切られ、とてもショックを受けた。

だがしばらくして、ジョバンニとカムパネララは、幻想第四次の銀河鉄道に乗っていた。カムパネララは舟から落ちたザネリを助けるために犠牲となって死んだ霊であった。カムパネララは本当の幸福をジョバンニに探させるために、架空の鉄道によって導いていたのだった。それをジョバンニに悟らせると、天国へ行ってしまった。

作者はこの作品を通して、他人を救うために自ら命を絶ったカムパネララが、貧しい家柄の友に真の幸福を求めさせようと霊となって導いた神秘的な友情を言おうとした。

藤森和彦

父が漁に出かけ、母も病床に伏しているの、ジョバンニは新聞配達や活字拾いのアルバイトをしている。そのため毎日教室でもねむく、本を読む暇もない。そんなジョバンニをザネリらが、「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ」とひやかすが、友達のカムパネララだけが、優しくしてくれる。

ケンタウル祭の夜、ジョバンニは牛乳を取りに行ったかえりに級友たちに出会い、またひやかされる。その上「カムパネララと一緒に遊ぼう」と思っていたのに、ザネリの集団の中にカムパネララがいたのに失望し、寂しさのあまり丘の頂上へ走り出す。そこへ寝ころんだジョバンニは、いつのまにか四次元空間を走る汽車に乗っていた。

ジョバンニはその車両の中で、ザネリを救うために死んだカムパネララや鳥を捕る人、子供を救うために死んだ青年等に出会う。このようなことから、ジョバンニの心に自己犠牲の気持ちが植えつけられ、銀河旅行の終わりに近づいた時、カムパネララはジョバンニが自己犠牲を理解し

たのを確かめて、天へ昇っていく。親友がいなくなったので、ジョバンニはひどく悲しむが、本当の幸福を求めると新たに誓う。

この作品は自己犠牲を強く訴えると同時に、妹と死別しひどく悲しみ、孤独を味わった作者をジョバンニに託して描いている。

尚、授業では初期形を使用した。

〔註〕

- (1) 上田哲 『宮沢賢治 その理想世界への道程』 明治書院 1985年
- (2) テキストは、『校本 宮沢賢治全集第十巻』に拠る。
- (3) 佐藤通雅氏は、この鳥捕りへの思いを感覚的な感想であるとし、次の段階への伏線と考えている。『宮沢賢治の文学世界——短歌と童話——』 泰流社 1975年 265頁
- (4) 『校本 宮沢賢治全集第十四巻』 585頁
- (5) 栗谷川虹 『見者の文学』 洋々社 1983年
- (6) 『聖書』 日本聖書協会 1983年 167頁
- (7) 同 上 240頁
- (8) 「農民芸術概論綱要」 『校本全集第十二(上)』 9頁
- (9) (1)に同じ 61頁
- (10) 田村晃裕編著 『日本仏教の宗派』 渡辺宝陽 「9日蓮宗 永遠のいのちに生きる」 東京書籍 1983年 257頁
- (11) (6)に同じ 264頁
- (12) 上田哲氏が前掲書で、「彼は現世逃避的に極楽浄土をのみ希求しているのではなく……」と述べている。 60頁
- (13) 『校本全集第十一』 7頁
- (14) 主題指導の方法については、『筑波大学人文科教育研究Ⅻ』を参照していただきたい。